チキンライス

下河原田吾作

僕の家はダンスホールを営んでいて、一階には狭いながらもホールがあり、日々の生活は二階で過ごしていた。ホールにはダンサーがいて、お客さんとダンスのお相手をしていた。僕が小学生、もう六十年ほど前の話。

土曜日の昼下がり、下校していつものように勝手口を開け、二階への階段を上がろうとしたとき、予想もしない光景を見た。女の人が階段の一番下に座り質素な食事をしていた。ごはんと小さなお皿に盛られたおかず。たしか今朝自分が食べた朝ごはんと同じものだった。僕がドアを開けた瞬間、こちらに目を合わせることもなく、慌ててお盆を自分の脇に引き、通路を開けてくれた。無言だった。

驚いた僕は、その人の横をすり抜けるように階段を上がり、台所で洗い物をしていた母に報告した。

「知らん人が階段でご飯食べてはった！」

「ちゃんと挨拶したか」

洗い物の手を動かしながら、母は慌てる様子もなく答えて、言葉を続けた。

「すぐに出て行ったらあかんえ。あと十分くらい、部屋で本でも読んでいよし」

しばらく勉強部屋で本を読んでいると、階段を上がる足音とともに小声で会話する声が聞こえた。その後、階段を下りる足音のあと母の声が聞こえてきた。

「もうかまへんし。遊びに行っといで」

階段を下りていくと、階段下の狭い事務室から父の声が聞こえた。誰かと話しているよ子だ。出かけるときに少し開いたドアから、先ほどの女の人が見えた。泣いているようすだった。なにか見てはいけないものを見てしまった気がして、そのまま外へ出た。

次の日の日曜日、父が外出で一人ぼっちになるので、母と一緒に出かけることになった。タクシーで見たこともない所まで行った。

平屋の古い家が並び、狭い間隔でドアが並んでいる中、母は薄汚れたドアを、軽くノックした。ドアは静かに開いた。部屋の中で、昨日の女の人と、その後ろに僕と同じ年頃の男の子がいた。僕はその子を黙って見つめた。その子も黙って僕を見つめていた。着ているものが違うことは子どもの目にもひと目で分かったが、何も言わなかった。

「昨日はありがとうございました」

女の人は小声でそう言うと、何度も上がるように母にすすめたが、母は上がり框に腰をかけ、上がろうとはしなかった。

「子どもさんは、どうしやはんの」

チキンライス

母が穏やかな口ぶりで尋ねた。終始うつむき加減の女の人は、小さな声で、晩ご飯だけは作っておいて、それから出かけると言った。学校の行き帰りはひとりでできるし心配ないとも付け加えた。

「帰りはタクシーで帰りよし。落ち着くまでは、それくらいは出したげるし」

母はそう言ったあと、顔を上げて後ろの男の子に話しかけた。

「お母さん、帰るの遅くなるけど、ちゃんと帰ってきやはるし。辛抱できるな?」

男の子は、コクンと首を縦に振った。

「そしたら、これ」

母は白い封筒と小さなケーキの箱を出し、うつむいたままの女の人の両手をとり、封筒をつかませた。箱は男の子の前に置いた。

「ちゃんと身なり整えて、もう少し血色ようなったら、顔立ちはええしお客さんはつくやろ。来週の日曜からでどうえ」

終始無言な女の人をあとに、母は僕の手を引いて外へ出た。出る間際に振り向くと、男の子はケーキの箱をじっと見つめていた。

「今の子どもさん、あんたと同じ3年や。あんな子もいやはんのやで」

僕は返事することもなく、狭く舗装もされていない道を黙って手を引かれて歩いた。

「昨日はびっくりしたやろ。あの人な、面接の後、帰るにもおなかが減って動けへんて言わはんね。びっくりして、あるもん出したげて、それであそこで食べてはったんや」

昨日の出来事を、僕の顔を見ながら、母は何事でもないように話した。

「お母ちゃんもおなか減ったわ。なんか食べにいこか」

しばらく歩き、大通りに出たところで、小さなレストランがあった。

「ここにしよ。お子さまランチもあるて。デパートみたいやな」

中は小奇麗にテーブルが並べられ、愛想のいいコックさんが出迎えてくれた。

母はお子さまランチを注文しようとしたが、僕はチキンライスでいいと言った。母はもう一度お子さまランチをすすめたが、僕はチキンライスでいいと言った。

「いつもお子さまランチやないと嫌やて言うてんのに、おかしな子やな」

母は笑いながら、僕を見つめた。

次の日曜日から、その女の人が来た。初めての日なので早めに来て、お母さんからいろいろ説明を聞いていた。僕はホールでメンコやコマ回しの練習をしていた。ちょっと目が合ったときに、その女の人は僕に会釈してくれた。僕はびっくりして慌てて頭を下げたけど、お母さんは笑いながら、ちゃんと挨拶しなさいよといった。階段でご飯を食べていた時よりも顔色もよくなって、嬉しそうに話を聞いていた。

チキンライス

でも、この女の人がここで働いているときは、あの子は家で一人でお母さんの帰りを待っているんだな。お母さんが帰るまで寝ないで待っているんだろうか。学校があるから早く寝ないといけないし。寝るときは誰もいない家で一人で寝るんだったら寂しいなと思った。

しばらくたったある日曜日、二階の居間でテレビを見ながらお昼ご飯を待っていたら、お母さんが慌てて階段を上がってきた。

「お母ちゃんすぐ出るし。あんた、お留守番できるな」

バタバタと着替えを済ますと、

「やっぱりあんたもおいで。子どもの来るとこ違うけど、お母ちゃんいつ帰ってこれるか分からへんし。こういう時に限って、お父ちゃんは組合の旅行やし」

僕は、お留守番くらい出来るのにと思いながら、よそ行きに着替えようと脱ぎかけた。

「もう、そのままでええ。急ぐんやし」

半分笑いながら、着替えかけた僕の手を取って、階段を降り外へ出た。小走りで大通りに出ると、お母さんは大きな声を出して、手も大きく振りタクシーを呼びとめた。押し込まれるようにタクシーに乗ると、早口で行先を告げた。お母さんの顔は真っ赤だ。

着いたところは、見覚えのある場所だった。前にお母さんと一緒に、新しい人が来る前に家庭訪問に行ったところだ。僕と同じくらいの男の子もいた。話はしなかったけど。

新しい人とは、一度だけ話したことがある。お店の人と話したらダメと言われていたけど、学校から帰り、家に入る前に向こうから「おかえり」と言ってくれた。名前は〝あやめ〟になるのって言ってた。お仕事での名前で、源氏名って言うと教えてくれた。

タクシーから降りると、パトロールカーの赤いランプが何台も見えた。救急車もいた。出入り口が狭い間隔で並んだ家の中で、そこだけが扉が開いたままになっていた。白い服の人や警察の人が忙しく出入りしていた。

「ご苦労さまです」

警察の人が敬礼しながら近づいてきた。

「この子を一人にしておくわけにもいかなくて、連れてきました」

お母さんは申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいですよ。じゃあ、僕はこちらで待っててもらおうかな。すぐに終わるしね」

婦人警官のおねえさんが僕の肩を抱いて、パトカーの中へ入れてくれた。パトカーの中は初めてだったので、なんだかワクワクしながら車の中を見回していた。

お母さんはすぐに出て来た。泣いていた。警察の人に何度も頭を下げていた。

急に騒がしくなったと思ったら、家の中からストレッチャーが出て来た。大きな白い布

チキンライス

がかぶせてある。そのあとにもう一台、今度は小さな布だった。周りからすすり泣きの声が聞こえた。

「身寄りもないとはいえ、小さな子まで」

「子ども一人残すわけにもなあ」

「こうなる前に誰かに相談くらい」

そんなささやき声が聞こえる中、救急車に運び込まれる二つの白い毛布の塊を見つめていた。

「そんなん、見んでもええ」

お母さんはいきなり僕の手を引っ張ると、急ぎ足で大通りに出て行った。大通りに出ると、前に来た時にチキンライスを食べたレストランがあった。家を出たのがお昼前だったのでおなかがへっていけたど、今日はそんなところでお昼ごはんを食べるとは言いにくかった。黙ってついていった。そのままタクシーに乗って家に帰った。

その日はお店は定休日だった。お父さんは夕方に帰ってくるので、お外に食べに行くことになっていた。近くの洋食堂で注文をして、出てくるまでの間お母さんとお父さんが小声で今日の話をしていた。

「あやめちゃん、そんなことに」

お父さんがびっくりして聞き返した。

「そやから気を付けやって言うてたのに」

うつむきながらお母さんが小声で続ける。

「遊びに来たはるお客さんなんやから、そんな人の言う事、真に受けたらあかんのに」

「本気にしとったんか」お父さんが驚いた顔で尋ね、そのあとで大きなため息をついた。

「ホンマにアホや。今度子どもにお父さんが出来るねんて、嬉しそうに言うてたわ。そんなことがあるはずないのに」

お母さんは、また目頭を押さえた。

「そんな時に、知らん女の人と温泉マークから出てきたんを見てしもたんやて」

「遊び人やから、そうなるの分かってなあかんのやけどな」

「もうやめとこ。子どもの前やし」

それっきりお母さんは黙ってしまった。

上等のお子さまランチがきた。けど、あまり美味しくなかった。最後のごはん、あの子は何を食べたのだろう。美味しいものだったらよかったのにな。お母さんがまた泣き出したので、僕も一緒に泣いてしまった。